

講壇点滴

神の御心ならば

使徒言行録一八章一八〜二三節

牧師 姜 俎 米

与えられた聖書箇所、二二節の終わりに、「アンテオキアに下った」とあるのが、第二回伝道旅行の終わり、二三節に、「パウロはしばらくここで過ごした後、また旅に出て」とあるのが、第三回伝道旅行の始まりです。アンテオキアに帰ったと思ったらまたすぐ次の伝道の旅に出たという感じですが、とても急いでいるように感じられます。エルサレムの教会の人々に挨拶をする、これが、このパウロの旅の目的でした。

パウロが切に願っていたことは、異邦人たちがただキリストを信じる信仰によって新しいイスラエルである教会に加えられ、エルサレムを中心とするユダヤ人たちの教会においても認められ、ユダヤ人の教会と異邦人の教会が同じキリストの教会として一つになつて歩むことでした。

パウロのこの心からの願いはエルサレムの教会に通じたのでしょうか。エルサレムのユダヤ人たちの教会の指導者たちは、パウロの伝道によって生まれた異邦人を中心とする教会を仲間として認めようとしませんでした。

パウロが立てた誓願、神様に強く願つた誓いは、この時実現しませんでした。人間の誓

いは、その通りになるとは限らないのです。これが神様の御心だと確信し、ぜひこうなつてほしいと思つて努力していったことが、うまくいかないことがあるのです。私たちは人生の歩みにおいて、そういうことをしばしば体験します。世の中、良いことなら必ずうまくいくなどということはないのです。人生は私たちの思い通りにならないことで満ちています。それが決してわがままな願いでなくとも、願つたことがその通りにならず、失意を覚えることがあるのです。しかしパウロはそのような挫折、失意によって、失望して、力を落とし、やる気を失つてはいません。

この使徒言行録の記述において、何事もなかったかのように直ちに第三回伝道旅行に出かけていることからそれが分かります。パウロは絶望しないのです。へこたれないのです。それは何故なのか。その秘密が二二節にあります。パウロは、「神の御心ならば、また戻つて来ます」と言いました。自分のかねてからの願いであるエフェソ伝道が実現するかどうかは、神様の御心次第である、その御心に自分は全てを委ねる、それがパウロの思いです。パウロはこのように、神様の御心に、すべてを委ねています。

箴言一九章二二節にこのような言葉があります。「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する」。私たちは、主の御旨のみが実現することを信じ、人の心の計らいが実現するかどうかに関わらず、主が示してくださる道を歩み続けることができるのです。

(二〇二六年一月二五日公同礼拝)

二〇二五年二月講壇一覽

第一主日(二月七日)

公同礼拝(アドベント第二主日)

「仕えるために来た方」 山北宣久牧師

マルコ 一〇・三五〜四五

夕の公同礼拝

「主をあがめる」

山北宣久牧師

第二主日(二月一四日)

公同礼拝(アドベント第三主日)

「命を授けるために来た方」 山北宣久牧師

ヨハネ 一〇・七〜一一

夕の公同礼拝

「神に喜ばれる歩み」

姜 俎米牧師

第三主日(二月二二日)

テサロニケI 四・一〜一二

「今日、お生まれになった」 山北宣久牧師

ルカ 二・八〜一四

夕の公同礼拝

「大きな喜びを」

姜 俎米牧師

クリスマスイヴ礼拝(二月二四日)

第一「本当の救い主」 姜 俎米牧師

第二「登録をするため」 山北宣久牧師

ルカ 二・一〜七

ルカ 二・八〜一四

第四主日(二月二八日)

公同礼拝

「わたしが共にいる」

使徒言行録 一八・一〜一七 姜 俎米牧師

夕の公同礼拝

「安らかに去らせる」

ルカ 二・二五〜三三 山北宣久牧師